

危険な運転行動と関連するパーソナリティ要因

Dangerous driving behavior and personality traits

東 正訓

(追手門学院大学心理学部)

1. はじめに

A man drives as he lives. (人はその人の生き方のように運転する)と言われるように、危険運転をする人の背景には、その人の生き方に影響を与えている性格（パーソナリティ）要因がある。本発表では、性格、パーソナリティとは何かについて触れ、パーソナリティ特性と行動との関係を心理学ではどのように捉えられているか、そして最近のパーソナリティ特性に関する研究及び危険運転との関係に関する研究の紹介をおこなう。

2. パーソナリティとパーソナリティ特性

いわゆる性格を心理学ではパーソナリティとよび、「個人の思考や行動の特徴を形づくる心身の統合的な仕組みであり、持続性と一貫性を持ちながらも、固定的ではなく変化発展し続けるもの」を指す。そして人間行動に影響を与える要因（変数）の一つとして扱ってきた。パーソナリティの中で持続的である特性変数をパーソナリティ特性（personality traits）という。持続的で内的な要因のパーソナリティ特性は、特定の状況で特定の行動に影響を与えるというよりむしろ様々な状況を越えて影響を与える。例えば不誠実でルールを守らない特性を持つ人は、危険な運転行動をするし、職場や社会の種々のルールを無視することがあるというようにである。

3. パーソナリティ特性論としての Big 5

Big 5 は現在世界で最も利用されるパーソナリティ特性論である。パーソナリティ特性論 (trait theory) とは人々の性格の違いを表現し位置づける枠組みや尺度を構成し、測定を試みる理論的立場である。パーソナリティ特性論は、第2次世界大戦後、因子分析法の普及とともに、16因子 (Cattell, 1957)、2因子 (Eysenck, 1957) というように様々な因子数が提案されてきた。近年 Big 5 がおよそ妥当ではないかということで、測定尺度も開発され、汎文化的な因子構造の安定性が検証されている (Costa & McCrae, 1985)。運転行動研究においても Big 5 との関係を検討したものが多い。Big 5 の各特性の内容を以下にし

めす。

外向性 (Extraversion); 高得点者は対人接触を好み、付き合いがひろく、社交的で出しゃばり、活動的でポジティブ感情をもつ。リスクが高い楽しい活動に参加する傾向があり、刺激追求欲求 (sensation seeking) と共通性があるとされる。低得点者はいわゆる内向的な人であり、対人的場面ではおとなしく控えめで慎重である。

開放性 (Openness to experience); 高得点者は創造的で興味が拡散するといった好奇心が強い人である。低得点者は一つのことに集中し、実用主義的で時には閉鎖的であるが職人芸的な達成にいたることがある。

神経症傾向 (Neuroticism); 高得点者は神経質、情緒不安定、不安感もちがちである。低得点者は情緒的に安定しており、穏やかでのんき、気楽である。

誠実性 (Conscientiousness); 高得点者は責任感があり、サボらず、達成的で、自己制御ができる。極端に低い場合は、無責任、注意散漫、衝動的でなまけもの、頼りにできない人と見られがちである。

調和性 (Agreeableness); 高得点者は気立てがよく、協調的、信頼でき、人を支援する傾向があり、他人とうまくやっていくことを重視する。低得点者は、他者と協調するより、自己利益を優先し、おこりっぽく、理屈こねで、同情心がなく、非協調的である。

危険運転に関係する Big 5 特性の第1は、誠実性である (Schwebel, Severson, Ball & Rizzo, 2006, Linkov, Zaoral, R'ezac, & Chih-Wei Pai, 2019, Hussain, Sato, Miwa, & Morikawa, 2020)。誠実性が高いドライバーは、交通ルールをきちんと守り、計画的で安全な運行をすると考えられる。第2に、調和性である (Hussain, Sato, Miwa, & Morikawa, 2020)。調和性が高いドライバーは、他者に対して攻撃的な運転（あおり運転やリスクを伴う衝動的運転）をしないと考えられる。また、刺激追求欲求や衝動性も危険運転に関係することが古くから指摘されているが、これらは高い外向性、低い神経症傾向、低い誠実性

(衝動抑制の低さ)と関連があると考えられる。神経症傾向の高い人は不安ゆえにスピードを出すなど危険運転をしないとみられるが、情緒不安定な時に事故と関わりやすいとみられる。そこで、神経症傾向と事故傾向性の関連に関する知見に一貫性は認められていない。

4. ダークパーソナリティと危険運転

Dark Triad は、3つのネガティブなパーソナリティ特性であり、危険な運転行動の理解に用いられてきた。

- ① ナルシシズム (Narcissism) ;いわゆる自己愛の強さを示すもので、自己誇大感を示し、傲慢で、権利意識、優越感、賞賛への欲求を強く持つ。
- ② マキャベリズム (Machiavellianism) ;他者を操作し、搾取する傾向であり、シニカルで非道徳的に振舞う。
- ③ サイコパシー (Psychopathy) ;共感性が欠如し、衝動的で、感情が冷たく、反社会的な傾向を示す。

これらにサディズム (Sadism) を加えた計4つの特性をダークテトラッド (Dark Tetrad) とよぶ。

ダークトライアドの3特性は危険な運転行動と関連が高い。3特性が全て高い人は運転中に怒りやすく、あおり運転など攻撃的な運転をする傾向がある (Lucidi, F., D'Amico, S., Mallia, L., & Chirumbolo, A., 2016)。Burtäverde, V., Chraif, M., Aniței, M., & Mihăilă, T. (2016) は、Big 5などのパーソナリティ特性の影響を除いた後も、運転時の攻撃性に対してダークトライアド、特にサイコパシーが増分妥当性をもつことを示した。Bushman, B. J., Steffgen, G., Kerwin, T., Whitlock, W. M., & Weisenberger, J. (2013) は、自己愛が強いと運転時の怒りや攻撃的運転を予測することを示した。特権意識が脅かされると攻撃的になり、優越感と共感性の欠如から運転違反をしやすくなる。マキャベリズムが強いと自己利益のために攻撃的運転をする。そして、サイコパシーは攻撃的運転に強く関連する。

このダークパーソナリティと Big 5 は強く関連する (Paulhus, D. L., & Williams, K. M., 2002)。協調性と強い負の相関、誠実性と負の相関をもつ。それ以外の関係はやや複雑で不明確である。外向性の下位側面である社交性、自己主張はナルシシズムと正相関をしめす。サイコパシーと神経症傾向の衝動性、不安定性と正相関がみられることもある。Honesty-Humility factor (正直さ・謙虚さ因子) を、概ね Big 5 に対応した因子群に加えた HEXCO モデルとの関連も紹介しておく。HEXCO モデルの Honesty-Humility factor は、ダークパーソナリティ全体と負の相関がある (Lee, K., & Ashton, M. C., 2005)。Honesty-Humility factor の負の方向は、他者を操作、搾取し、自分の利益を

優先する傾向である。Honesty-Humility factor はダークパーソナリティの核心部を捉えていると見ることができると、危険な運転行動と関連が予想されるだろう。

4. 性格特性論から見た運転行動

交通事故の3大原因は人・クルマ・道路要因であるが、なかでも人的要因の影響力は9割以上と大きい。その背後に認知的、性格特性が関連すると見られる。注意すべきは、性格が事故の有力で決定的ないし至近要因とは考えないということである。特定の性格特性が強い人がある種の事故を起こしやすいということが統計的に見られたとしても、性格が原因であるとはいわない。あくまで性格は背景要因である。

パーソナリティ特性は遺伝・環境の相互作用のもと形成されたと考えられており、Big 5、HEXCO モデル、ダークパーソナリティはそれぞれ潜在的な個人差変数である。これらを基本特性 (basic tendency) とよぶ。これよりも行動に影響力をもつであろう、個々人の生きる環境下で獲得されたスキル、習慣、態度、対人関係スキル・スタイルは、基本特性の影響を受け、人々が個々人の生活環境を過ごす中で具体的な個人差として現れたものである。これらを特有的適応 (characteristic adaptation) とよび、個人特有の環境への適応として獲得された各種の傾向性であり、行動に及ぼす機能をもつ個人差変数となる。運転態度、運転習慣、運転スタイルも特有的適応に数えられる。特有的適応の諸要因は、性格特性のコア部分とは異なり、環境、家族関係、発達段階のどこにいて影響をうけて、後天的に形成されるため、態度、悪習慣、悪質な運転スタイルは変容可能性があると考えられる。

特有的適応の中で重要とされるものに、自己概念 (self-concept) がある。自己概念は自分について知っている知識内容、見方、自分の人生に対するストーリーやアイデンティティ (例;かつて走り屋であった自分...)、自己評価を含む。これらの自己概念の一部は危険運転行動に影響することがある (例;PWM モデル)。

6. 今後の課題

無謀としか言いようのない危険な運転行動や向社会的な運転行動を理解するうえで Big 5 やダークパーソナリティの観点は役立つ。種々提案されている尺度を使った実証研究の知見が集約されることが必要である。さらに、パーソナリティ特性と運転行動の関係の知見をもとにして、ドライバーのパーソナリティ検査尺度の結果を運転指導や事故を起こしたドライバーのカウンセリングなどにどのように生かしていくかを検討する必要がある。